

雪月下

空野閑人

登場人物

空野閑人（そらの しずひと） 大学生。男性。

雨宮玲音（あまみや れいん） 探偵。女性。

12月、中旬。秒読み状態になったクリスマスに、今から浮ついているみたいだ。あるいはそれより先、年末年始を見据えているのか。いずれにせよ、世の中なんだからそわそわしている。ポストにはオードブルやらおせちの予約承りますのチラシが投函されるし、街に出ればイルミネーションがあちこちに纏わりつき、きらめいている。スーパーへ行つたときにはすでに、シャンメリーや七面鳥がいつの間にか、商品棚に並んでいた。七面鳥には悪いけど、スルーしていつも通りの豚こまを買った。シャンメリーは甘くて美味しいから買った。

師走といいつつも、な〜んとなく、浮かれてる。走る

その足取りは軽やかなんじゃないか。

一方で僕も、浮遊してる。地に足がついていない。「悩む」が一向に「考える」に移行しない、だから財布とケータイだけ持って、近所の公園をひたすらぐるぐる練り歩いていった。風はなく、ただ雪がちらちら降る冬の深夜だった。

歩みを止めれば頭も止まる。悩んでいるということは考えてはいないということ。悩むことはウロボロスの如く、懸念と回避の往来でしかない。解決させるのは考えるという行為だけがもたらすとはわかっているのだけだ。

降り積もった雪を踏みしめてぐるぐる回る。回っているから、当然1周目の足跡が目の前に来る。2周目は同じ足跡をつけるように、3周目はあえて違うところに。明日は晴れの予報だった気がする。なら、僕が施した化粧も消えてしまうのだろう——ああ、気が散っている。人間の集中力の持続時間は60分だったか30分だったか。90分105分も続かないことは覚えていて、ならば休みなく講義を行う教授はやはり嫌われてしかるべきなのだろうか。

いよいよ集中が途切れてきたことを自覚したので、雪

化粧を払ってベンチに腰を下ろした。腕時計を見やると、丑三つ時をとうに長針2周分は過ぎていた。

作り上げた、異様に足跡のある奇天烈な公園を眺めると笑えてくる。遠くから聞こえてきた救急車のサイレンの音色が、美しい。

ピーポー、また誰かが死にそうになってる。ピーポー、一方でろくに死ぬつもりもないやつが電子の海で死をフアッションの道具にする。ピーポー、言霊としての死の効力は現代においていかほどなのか。ピーポー。

やっぱり、救急車は遠ざかるときの音の方が好きだなあ。そんなことを考えている僕も誰かの危篤を嗤う不屈きものに違いない。なんて、自己嫌悪をしながらベンチに沈んで水銀灯を眺めている。すると、不意に声をかけられた。

「家賃の滞納でもしたのかな。貧乏学生だという認識はなかったけれど。しかし——追い出されたにしては荷物が少ないね？」

「……相変わらず足音しないですね、所長」

かすかに首を後ろに向け、言葉を返す。完全に振り向くまでもない。声の主は、僕のバイト先の探偵事務所所の所長、雨宮玲音だ。いつも通りの、丈の長い黒いコートと丈夫そうな編み上げのブーツ。差し色に黄が入るもの、ほとんど黒一色だ。これが冬でなく夏なら、立って

いるだけで人間（なのか？）の蒸し焼きが出来上がりそうだった。

彼女は20センチほどの間隔を開けて隣に座り、何か缶を差し出してきた。例外なく底に粒が残ることで馴染みのある、コーンスープの缶だった。ありがとうございませ、と反射的に述べ、しばしカイロ代わりにして手を温める。プルタブを開ける。ほわりと湯気が上がる。メガネが曇る。香りを確かめてから口をつける。

「感謝するなら、なにも警戒せずに飲んでくれればいいのに」

「だって前、コーヒーだよって渡されたヤツ、中身納豆汁だったじゃないですか。あれひどいんですよ。なんかどうか当然ですけど粘るし匂いが壊滅的だし、味噌の塩味に納豆の苦み……みたいなのが合わさってハチャメチャでしたよ」

「でも、笑えたね、あれは。一見、嗅ぐだけならコーヒーっぽくて」

「んまあ、そうですけど」

確かにあれは面白かった。ご当地グルメみたいなノリの商品で、実にコーヒー缶らしくデザインされたものだった。企画した人はコーヒー豆の「豆」の部分から連想ゲームでもしたのだろうか。愉快だけど、愉快だったけど、いまでもちよつと、恨んでる。

「それで。なんでこんな時間に、こんなところでひとり。藁人形でも打ち付けに来たの？」

「あいにく、僕は金槌持ってないです。釘もないですけど——ああ最近ドアのから抜けたネジなら代用できるのかな——ですけど、藁人形作りに必要な材料を取れる間柄の中で、殺したい人間は、幸い、いません」

両手で缶を包み込み、メガネを曇らせたまま話す。手袋越しでも、十分その温もりを享受できた。手が温まると、今度は足先の冷えを強く感じ始める。

「……未だに高校のときの記憶にすがってる、みたいな部分があります。それも美化された記憶なのかなとも」

「青いね。それがこんなに君を悩ませるほどだとは、思わないけど」

「そうですね。今抱えてる悩みはもう少し転がしておくことにしようかなと思うんです。なので、別件で……これで、お茶を濁させてください」

スープを一口啜る。甘みの中にわずかな塩気が効いていて、体の芯がじんわりとする。そんな芯があったのか、とも思う。

「昔は良かった、なんていうと年寄りくさいですけど。そんなことを言ってしまうのは現状になにか不満を感じてるのかなと思うし、でも間違いない、これがいいと思っ

て選んだ道なんですけど。そう思っている今も将来的には良い思い出になるのだろうかと思うと、人間はいつまでたっても過去に恋して現在の魅力に鈍感であり続けるのかしら、とか。ちよつと主語を大きくしちゃいましたね、スイマセン」

彼女は足を組み替え、手で顎を支えながら身を乗り出した。

「私は君よりも長く生きていくけれど、岐路にさしかかって絶対の自信とともに選ぶことはなかったよ。それでもまあまあ現状に満足していて。ありえた未来を切り捨てて得たものが、間違いなく失ったものよりも多かったと感じているのかも。や、そうであると信じてすがっているのかもね。その実、たればを考えたらキリがなくてさ。過去にたればを求めても、それは空しい営みだ。何が変わるわけじゃない。でも、今直面していることは、

これから何をどれくらい捨てることになって、いくつ新たに手に入るかわからないから。だから悩む、考える必要がある。終わった過去について悩むのはひとつの趣味のようなものだと思えることもできてしまう気がするよ」

足を組んだまま、所長はどこからか取り出した湯気の立つティーカップに口をつけていた。そして、まあなんというかさあ、と切り出した。

「今を考えることは疲れるから、今が嫌いなんじゃない

かな。結果がすぐわかるものでもないし。でも、疲れることは半分義務みたいなものだと思うんだよ、幸せになるならね。信じた幸せに近づくためには。現状がイマイチしつくりこないものでも、それでもいろいろ継続したり、新規開拓しておく方がいいよ、というのが年長者としての言葉かな。あとは神のみぞ知る、だよ。無責任で「ごめんだけど」

閑人君の好きな本で言うところの、神の味噌汁だね、ふふ、と小さく彼女は笑った。それもそうかもしれない。

当然と言えばそうなのだろうけど、コーンスープは喉を潤すのに適さない。彼女がひとしきり話し終わる頃には「冷たくていいからお茶をくれ」という気分になっていたし、空いた缶がぬくもりを失うのは思った以上に早く、遠くに見えるマンションの、明かりが灯っている部屋の数はずいぶんと減っていた。

玲音が無造作に、カップを空中に置くようにすると、それは虚空へ飲み込まれるように消えた。体を伸ばしてくつと立ち上がり伸びをする彼女。つられて視線を上に向けてると、月はとうに沈んでいて、向こうの空が白んでいることにも気がついた。

この人は何者なのだろう。視点の高さ。きちんと、人間関係とか将来への不安とか、たくさんの鎖に繋がれて

いる人間のひとりのはずなのに、すごく身軽そうに見える。

「……そういうものですかね。とりあえず——とりあえずじゃないですね。なんか、気にかけてくれてありがとうございました」

「日頃、作ってくれているお茶うけのお礼だと思ってくれればそれで。ちなみに、明日の私はあの、くるくる巻いたお菓子が食べたいらしいよ」

「明日というか、もはや今日ですね……んで、あれ作るのステー面倒なんですけど……」

僕の文句もどく吹く風、楽しみにしているよと言い残して彼女は去っていった。足音はなくとも足跡はあるから、かろうじて人間なんだろうとは思う。

僕も立ち上がり、家路につく。通りすがりのコンビニで缶を捨て、卵やら砂糖やらを買い足す。そのままお菓子コーナーを後にしようと思ったのだが。

「お菓子の家キット……」

最近のコンビニはこんなものまで売ってるのか。それにしてもコレは……知ってるぞ、これ作るのすつごい大変だつて。昔、親と作ったから。建材をオーブンで焼くだけで1日終わるし、下手こくとめちやくちや固くなつて、狼でも勝てない3匹目の豚が建てた家並みに堅牢に

なるんだよこれ。そもそも、作る余裕があるのか？

……でも、なんか。作ったら、子どもみたいなあどけない顔で「わあー」なんて言っつてよろこぶだろうな、あの人。お茶うけにしちやあ大きいけど。やるか。きつと  
その方が、未来の自分が笑っつていそうだから。

急に増えた買い物カゴの重量が、なんだか楽しい。やっぱ僕も、浮かれているのかもしれない。重い買い物かごを持っつていても、地に足つかないほどの強い浮力で。